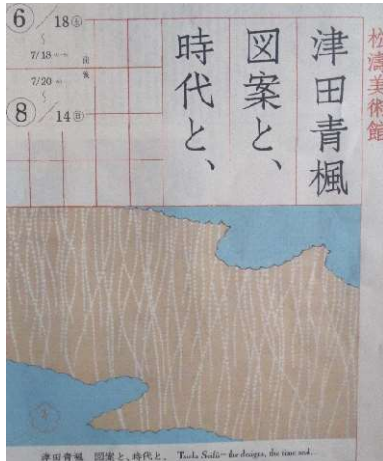


津田青楓 図案と、時代と、

渋谷区立松濤美術館 2022.06.18～07.18(前期) 07.20～08.14(後期)



工芸品の下絵として捉えがちな「図案」は、明治から大正時代は必ずしも何かに応用されるために描かれるのではなく、また「絵画」とも異なるものとして存在するようになった時代であった。

明治時代に欧州の美術やデザインが日本でも広く知られるようになると、それまでの伝統的な「図案」から脱却して、独自の創意を持って考案しようという機運が高まった。職人の図案制作に画家も携わりその芸術化が試みられいわば「図案の変革期」であった。

津田青楓 《青もみじ》1巻(本田雲錦堂)より 1899(明治32)年

「津田青楓(つだせいふう)」(1880～1978)は、明治、大正、昭和と変化する中で、日本画、洋画、工芸、書など幅広い分野で活躍し、「図案」はそれまでの形にとらわれず自己の表現としても制作されるようになった。

本展は、明治30年代に京都で多くの図案集を出版し、大正時代には「夏目漱石」らの本の装飾も手掛けた「津田青楓」を軸に「図案集」と「図案」についての作品を紹介して、自己の表現としても制作される「図案」の世界をひもとく企画で、それまでの形にとらわれず、自己の表現としても制作されるようになった「図案」の作品の世界を楽しむことができる。

津田青楓 《うずら衣》 1903(明治36)年 左図の右上の作品

「自己は自己の図案をつくらねばならん」と制作にかける意気込みがある。

